

していないところから、北と南のフランスは図師氏の想定する完全な他者ではなく、あくまで封建王政の身分格差のなかで関係していたことが理解できる。従ってトゥールーズ市民は現実的路線において政治的手法をもって格差の枠内での特権獲得を画策したのである。よって図師氏の特権の請求を通して互いの関係を決定させたという論は適当ではないのである。

削除条項を概観すると、王の権威、文書、法的手続き等における王権の優位性、経済、度量衡における市民の恣意性の否定を見ることができる。この具体的事象をとおして、フランス王権は自身の霊的な優位性、法理的な支配権を現実に応用していったのである。図師氏は王権側が慣習に権威を与える事で法を通じた支配を意図しているのに対し、トゥールーズ市民が慣習法の特権と認識しているというズレを指摘している。図師氏は慣習法を通して、都市が特権を主張するばかりでなく、「法」として都市を縛る論理となったと考えているのである。

しかしこの点について、一二七一年の伯領差し押さえの時点でトゥールーズは現実的にもフランス王権の支配下に入っていたのである。よって、あくまで都市は王権の下位に位置づけられる存在であり、王権が法理的な支配権を有する都市に対して、その支配を敷衍、実行するという政策的な問題に発展したのであった。それゆえに、慣習法の成文化によって現実的に南フランスが王権の下に吸収されたのであるといえる。従って、図師氏の指摘するような関係構築論は成り立ち得ないのである。

六、終わりに

従来、アルビジョワ十字軍とフランス王権の伸張は、ウォルフや渡邊といった研究者に代表されるように、その起因の解明と王対領主という側面に注目される嫌いがあった。図師はその中に王と市民との関係を見出したのである。しかし、図師の論は現実的な構造には効果的な説明がなされていたが、中世の霊的構造に対する配慮が至って

いなかったのである。従って、図師の論を封建王政の文脈において、霊的、法理的な支配の現世的適用の課程として読み直す必要があったのである。その中で見出されたのが、王権とトゥールーズ市民との間で取り持たれた、身分に根差した折衝であり、せめぎ合いであったのだ。その身分間の対話は、伯領差し押さえにおいて意図のずれとして表面化し、慣習法の成文化に至って、双務的な関係として結実したのである。

〈考古学専修〉

黒海沿岸地域における

竿頭飾の研究

―構造に基づく分類の試み―

川畑 隼人

ユーラシア大陸の中央部には広大な草原地帯が広がっており、この地は古来より東西交渉において重要な役割を果たしてきた。実際にモノや人の移動に関わっていたのは、

馬に騎乗し移動しながら家畜を飼育していた騎馬遊牧民である。今日、様々な発掘調査の成果により、紀元前一千年紀の初頭には武具・馬具・動物意匠に代表される騎馬遊牧民の文化が、草原世界の全域に広がっていた事実が明らかとなっている。

この草原世界の東西に広がった文化の、最初の担い手がスキタイであると言われる。「世界最古の騎馬遊牧民」とも称される彼らは、文字を持っていなかったため資料が希薄である。そのためスキタイの歴史を解明するためには、考古学的な手法が有効であり、彼らの文化は墳墓（クルガン）に埋納された副葬品からその一部を知ることができる。

黒海沿岸地域におけるスキタイに関連する遺跡は墳墓がほとんどで、遺物も副葬品が大半である。先行研究によりスキタイ文化は前・中・後の三期に大別される。前期は前七世紀から六世紀にかけてであり、クバーン川流域に墳墓が造営される例が多く、遺物には西アジア的な要素が濃い。中期は

前六世紀末から前五世紀にかけてであり、ドニエプル川下流域を中心に墳墓が造営される。この頃はギリシア植民市との交易が始まった時期で、遺物にもギリシア的な要素が見られ始める。後期は前五世紀末から前四世紀にかけてであり、大量に発見されるギリシア製品によって、さらに四期に細分されている。墳墓はドニエプル川下流域に大規模なものが造営され、遺物はギリシア的な要素が一層濃くなる。本論では、墳墓から出土する副葬品のひとつである竿頭飾（ポールトップ）に焦点を当て、その系統を明らかにすることを目的としている。ポールトップの用途は未解明であり、定義も曖昧だが、型式設定を行うことにより、ポールトップを捉え直していく。

一般に「ポールトップ」と呼ばれているものは、下部に柄を差し込んだ蓋を持ち、上部には騎馬遊牧民の遺物によく見られる動物意匠が表現されることが多い。この遺物は東西を問わず、紀元前一千年紀の草原世界から出土している。用途に関してミン

ス (Minnis, 1913) は、ポールトップを「Standards」と呼称し、被葬者の身分を象徴するものと考えている。また馬とともに出土する例が多い点から、葬送車 (Funeral cars) に付随する器物であると考えた。イリンスカヤ (Il'inskaya/Ilyinskaya, 1963) は黒海沿岸地域の各地から出土しているポールトップを集成し、地域ごと時代ごとの特徴を述べている。資料提示はしているが、そこから型式や編年を確立するという作業は行っていない。バカイ (Bakay, 1971) はカルパチア盆地から出土するポールトップを中心とした考察を行っている。バカイは、それまでのポールトップの用途に関する仮説を否定している。馬車にポールトップがついていたならば、その音色は騒音にかき消されて聞こえず、実用的な機能を説明することはできない。車馬具という説を退けた上で、儀式において振り鳴らされたものという結論に至っている。ペレヴォトチコヴァ (Пелевочикова, 1980) はポールトップを初めて十一の型式に分類してい

る。ペレヴォドチコヴァの分類基準を見ると、時に動物意匠に注目し、時に鈴の形態に、時に透かしに注目するなど、全体を貫く分類基準が見受けられない。ポールトップをどのような基準をもって分類していったのか曖昧である。型式分類というよりは、地域ごとの特徴を述べてまとめたという印象を受ける。またペレヴォドチコヴァはポールトップの用途に関して、世界樹信仰と結びつけて考察している。高浜（一九九三）は中国北方など、草原地帯の中でも東側で発見されるポールトップに関して考察を行っている。その中で西側のポールトップについても触れて、黒海沿岸地域から出土するものは音を鳴らす構造を持ち、独自の発展を遂げた」と指摘している。

このようにポールトップの分類は動物意匠を基準に行われている場合が多い。だがポールトップに用いられるモチーフは多様で、異なるモチーフ間の対応関係がわかりにくいものとなっている。またペレヴォドチコヴァの型式分類は、研究の進展するに

つれ齟齬が見られる。これまでのポールトップの用途に関する考察は様々であるが、いづれも説得力に欠け、すべてのポールトップを説明しきれていない。そもそも定義が曖昧であり、便宜的に「ポールトップ」という名を付された資料をひとまとめに考察し、用途や機能を推定してしまうこと事態に問題を感じる。

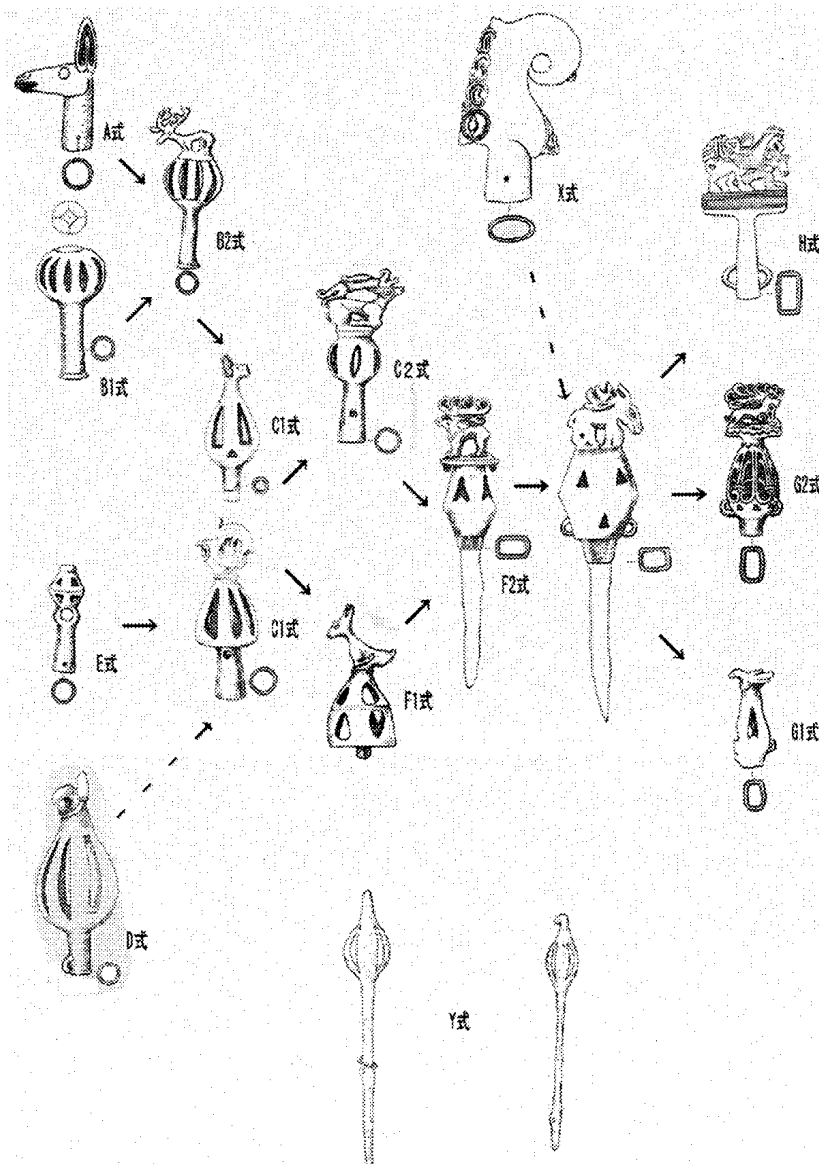
用途不明遺物をひとまとめにして推定するのではなく、研究史をふまえた上で、分類を行い、考察を加えるべきと考える。その際に動物意匠を基準として分類すると、多様な意匠間での系統立てが難しいことが予測される。ポールトップの用途は明確ではないが、実用を意図して機能的に製作され、使用された痕跡を認めることができる。そこで本論では、使用の際に棒を差し込んだと思しき盞に注目し、その形態を基準として分析を行った。ポールトップに関する議論は、その定義と系統が確立してからなされるべきであろう。分類基準としては、以下の項目に着眼した。盞の形・耳や環の

付く位置・動物表現などがその主たるものである。細分すると盞の形は円筒形と矩形と棒状に大別でき、耳の付く位置は意匠部・鈴部下に大別できる。動物表現については、モチーフが何であるかではなく、表現が立体的であるか平面的であるか、もしくは動物意匠を持たないかで分けている。（表・図参照）

盞の形が円筒形と矩形、動物表現が立体的な例と平面的な例は、それぞれ同一墳墓からは伴出せず、大まかな時期差を反映している。初期においては盞部の形態が様々であるが、次第に盞部が簡素化されていき、さらに円筒形から矩形へと変わる。また耳の付く位置が、時代が下るごとに意匠部から鈴部へと下がってくる。動物表現も立体的な丸彫表現から平面的なものへと変化している。このような分析を行うことで、ポールトップに細別型式を与えた。ポールトップは地域差や時代差が顕著な遺物であるが、今回設定した型式により系統的に捉えられる。

釜の形	大孔の有無	鈴の有無	環・耳の有無	基部加工の有無	動物表現	型式			
円筒形	大孔無	鈴無	→	→	→	立体	→ A		
		鈴有	環無	広がり・膨らみ有	→	無	→ B1		
					→	立体	→ B2		
				広がり・膨らみ無	→	立体	→ C1		
					→	平面	→ C2		
				環有	→	→	立体	→ D	
					大孔有	鈴有	→	→	→
		矩形	大孔無	鈴有			環有	無	→
→	平面				→ F2				
耳有	→				→	→		立体	→ G1
	→				→	→		平面	→ G2
環有	→				→	→		平面	→ H
	楕円筒形				→	→		→	→
棒状	→	→	→	→	→	無	→ Y		

型式変遷案



ここで改めてポールトップの定義を考えてみるならば、音を発する機能と構造がその特徴である。また青銅製で、盞を持つ例が大半である。逆に本論でY式としたものは、鉄製で盞を持たず、最初から柄が付随し、形態はほとんど変化しない点で特異である。続いてX型式は、楕円筒形の盞に平

面的な鷲グリフィンの頭部をモチーフとする点で共通性が高く、同時期の他の型式には見られない耳や鐸を持つ点で特徴的である。H型式が年代的に新しいことは、伴出しているギリシア製品との関係から推定できる。矩形の盞をしているが、鈴を持っていない点を大きな変化として捉えることが

できる。また動物意匠の中に闘争文や人物が表現されていることも特徴的である。以上の三例は他の型式に比べると、いずれもその前段階のポールトップからの系統を読み解くことが難しい一群である。これらの資料には機能差があったか、あるいは製作者の違いがあったと言え、いわゆる「ポールトップ」ではない可能性が大きい。この点をふまえ、ポールトップはA・B・D・E式に始まり、C・F式を経て、G式への系統をたどったものと想定できる。